



半途退学者調 (明治41年6月調査) ↑

明治35年3月に土浦中学第1回生34名が卒業しました。明治30年4月の入学時には80名でしたから、卒業までに48名が途中で退学していることとなります。中途退学者の入学者に占める割合は58%となります。明治後期(30年代、40年代)はこの6割を超える状態が続きました。このこと及びその背景についてはAcanthus10号(2月17日発行)で簡単に触れました。今回はさらに踏み込んで、全国的な視野から考察してみましよう。そしてそれを通して明治後期の中学生の学校生活の一端を紹介できればと思います。

「半途退学者調」

旧本館資料室に「半途退学者調」(当時中途退学者をこう呼んだという資料が二つ展示されています。これらは第七回生(明治 年入学)を除く第一回生から第十一回生(明治 年入学)までの入学数と卒業数、中途退学者数およびそれらの入学数に対する割合を記した資料です。入学数は年度によっていくらか違いますが、中途退学者の割合はいずれも %を超えています。第三回生(明治 年入学)はその割合はなんと %でした。

これらの数字は何を物語っているのでしょうか。資料「半途退学者調」には退学の原因として、家事都合・成績不良・転学の三つが挙げられています。しかしそれぞれの人数までは記されていませんので、何が大きな原因であったのかよく分かりません。なぜこのように多くの中途退学者が出たのか、他の中学校ではどうだったのか、また、これらから明治期の中学校生活について何かを読み取れないものか気になるところです。

この疑問を考えるのに『文明国をめざして』(牧原憲夫著、小学館)、『試験と競争の学校史』(斎藤利彦著、平凡社)の二冊はいろいろな示唆を与えてくれます。特に斎藤氏の研究書には負うところが大きかったです。

明治前期の小学校と試験

文部省が明治5年に頒布した『学制』は半年ごとに進級試験を行い、さらに小学校の全課程を終了した時点で卒業試験を行うべきことを定めています。また同年同省が出した『学制着手順序』は「生徒階級を踏む極めて厳ならしむ……毫も姑息の進級をせしむべからず」と定め、各府県はこの条文を基にして、総点

のおおむね6〜7割以上の得点をとることを進級の条件とする規則を設けました。この条件を満たせず落第していった生徒も多かったのです。卒業、進級の試験のほかには「月次試験」を行ったり、郡内・県内の生徒に成績を競わせる比較試験(集合試験)を行ったりしました。

また、県令や書記官が成績優秀な生徒に褒賞を授与することを目的とした巡回試験を実施するところもありました。そして、試験の成績で教室の席順を変えたり試験の成績を落第者の名前をも含めて校門の前に掲示したり、父兄に直接通知したりしたのです。このように明治中期まで小学校では試験の成績が重視されたのです。学業面での競争を通して、学習意欲を高めて学力を向上させようとする考え方に文部省や県は立っていたように思われます。

試験による競争の弊害が指摘され、文部省が競争を抑制するようにするのは明治24年からで、明治33年に至ってようやく試験によって進級と卒業を認定する制度を廃止しました。『学制』頒布以来約30年間小学校を支えた試験制度と競争の仕組みは改められたのでした。

他の中学校の中途退学者

しかし中学校ではその後も制度は変わりませんでした。それでは他の中学校はどうだったのでしょうか。土浦中学の分校から出た発した県立龍ヶ崎中学校では、明治32年から41年までの十年間の入学数の中で、中途退学者は合わせて803名。土浦中学の前記資料の十年間の退学者は合わせて859名。同じ時期の群馬県立前橋中学校の中途退学者の割合は58%、三重県立上野中学校は59%です。全国的な統計による平均は57%になっています。したがって、どの中学校も同じくらいの割合で中途退学者を出していたことが分かります。

中途退学の原因

この原因を考える上で念頭に置かねければならないのは、当時は入学イコール卒業の考え方は強くなかったことです。各学年修了者には「学年修業証書」が授与され、二、三年生んで社会に出ていく例もありました。

全国的な統計では経済的理由に因る中途退学者は、明治37年から42年までの6年間で11%前後であり、そう多くはありません。

前橋中学校の同時期の資料によると、退学者数に占める「落第のための退学」者の割合は40%前後となっています。落第しつつも卒業した者の割合が9%ですから、落第が中途退学の主な原因であったことが分かります。このことは、土浦中学についてもあてはまると考えられ、いくつかの統計からも全国のどの中学校についても言えるように思います。

厳しい学業と土中生の矜持

明治34年の『中学校令施行規則』では平素の学業と並んで試験を「修了と卒業の必須条件」にすべきことと定めていました。年2回の学期試験と学年末の学年試験が最重要視され続けました。試験の成績が基準に達しない者は進級できなかつたのです。そして土浦中学校ではその成績は、他の中学校と同様に、上質紙の小冊子『学年試業成績表』(全生徒を学年別に成績順に並べ、一人ひとりの各教科の評点、合計点、及落、氏名等を記したものにまとめられ、生徒を通して保護者に届けられたのでした。また、小学校では廃止された成績によって教室における座席の順序を決めるやりかたも続けられました。

このような学業に対する厳しさの中で、明治後半期の土浦中学の生徒達は、その現実を大きな槌(てこ)として勉学に励んでいたのです。それが土中生の面目であり、矜持にもなっていたのだと思います。そしてこの心意気は、現在の土浦一高生の学業に対する真摯な姿勢として受け継がれていると考えてよいのではないのでしょうか。